



JBL GRAPHIC '84



JBL

The JBL Way

伝説の偉人がみなそうであるように、彼の生涯は波乱に満ちている。JBL社を興し、今日のスピーカー技術の基礎を築いた男、ジェームス・B・ランシング。JBLの名は、

いうまでもなくそのイニシャルをとったものである。彼は根っからの技術者だった。スピーカーづくりにかけては、おそらく並ぶものない天才技術者だった。幾つもの輝かしい名作を遺した彼は、しかしその才能と信念の故にしばしば人との妥協を拒んだ。一途に完璧を願い、品質を徹底的に重視した。彼を曲げることは誰にもできず、そのためランシングの人生は栄光と挫折とがいつも背中合わせになっていた。だが、彼の正しさと偉大さは、それから時を経るにつれいよいよ明確化されてゆくのである。

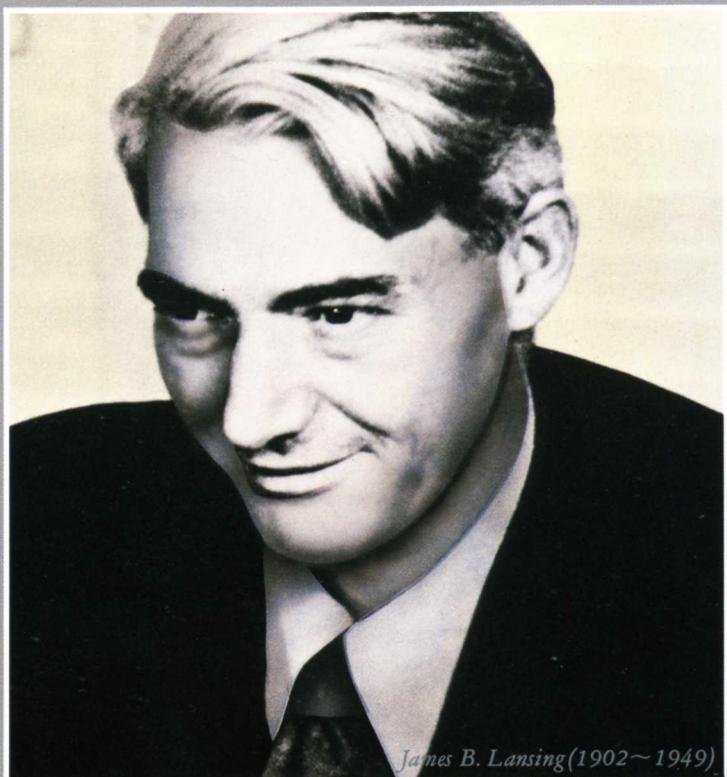
1927 ジェームス・B・ランシング。古くからのJBLファンには“ジム・ランシング”と親しみをこめて呼ばれる外柔内剛の天才技術者。彼は1902年にイリノイ州で生まれています。生来の科学好き。少年時代には世界でもっとも早い時期にラジオ送信機を自作したというひとかどのエンジニアでした。自動車工場の職工などを経て、22歳の年にユタ州ソルトレークで放送局の技師に転身。ジム・ランシングの運命はここで大きく変わります。実業家ケン・デッカーと出会い、スピーカーづくりを志すことになったのです。1927年、ジム・ランシング25歳の春に、2人はロサンゼルスへ移り、

「ランシング・マニュファクチャリング社」を創設します。ささやかな町工場とはいえ、それはジム・ランシングがついに探しあてたライフワークの始まりでした。彼の才能は

急速に開花してゆきます。1927年は、トーキー映画の第1作「ジャズシンガー」が公開された年。若き技術者ジム・ランシングの未来も約束されているかのようでした。

1934 しかし、ほどなく1929年の大恐慌がやってきます。ランシング・マニュファクチャリング社も容赦なく不況の波にもまれ、苦難の時代を過ごします。唯一の救いがトーキーでした。暗い現実から逃れるために、人々は映画館に殺到したのです。そしてジム・ランシングに劇的なチャンスが訪れます。MGM映画からもちこまれた始めてのビッグ・ビジネス。劇場用スピーカー・システムの製作です。ジム・ランシングは全力を費して1934年にこのシステムを完成します。それは、38cmウーファーのダブル・ホーンとマルチセラー中高音ホーンから成る大型2ウェイでした。

1936 ランシング・マニュファクチャリング社によってつくりあげられた斬新なこのシステムは、当時のMGM音響部長で基本計画を指導したダグラス・シャラーの名をとつて「シャラーホーン・システム」と呼ばれます。シャラーホーン・システムは素晴らしい成功をおさめ、1936年に映画芸術科学アカデミー賞を受けました。まさしく



James B. Lansing (1902~1949)

彼の魂は今もJBLに生きている。
生涯を音に賭け、壮烈に殉じた天才技術者
ジェームス・B・ランシング。

JBLサウンドの原点といえる鮮麗なその音質とともに、ジム・ランシングの名も広く知られるようになりました。より小型な2ウェイ・システム「アイコニック」を始めとして、彼がつくりあげるスピーカーはまたたく間に市場を席巻してゆきます。それからの数年間は、彼にとってもともと恵まれた時期でしたが、1939年にケン・デッカーが突然世を去って、技術者であるジム・ランシングに経営の負担が重くのしかかります。2年後、彼はついに会社をアルテック・サービス社に売り、技術部門担当の副社長として

新しいアルテック・ランシング社に奉職するのです。経営の労苦から解放された彼は、ふたたび天与の才をふるいはじめます。604ユニット、A4シアター・システム、油圧成型のアルミ・ダイヤフラム、あるいは製造ラインの決定からアフターサービスまで、彼は一流の完璧主義を貫き通して、この時代にも偉大な業績を残しています。

1946 第2次大戦が終って1年。平和の時代にジム・ランシングはもういちどみずから夢をふくらませ始めます。40歳代のなかば、経験豊かな技術者として、ひとりの人間として、彼は誰にも制約されずに彼自身が納得できる最高のスピーカーに挑むべき時期がきたと考えました。ジェームス・B・ランシング・サウンド・インコーポレーテッド。現在に連なるJBL社が、こうして1946年に設立されます。ジム・ランシングは、図面を書きあげたあとはそれぞれの専門職に仕事を任せて結果を待つタイプの技術者ではありませんでした。必要な素材の開発から工作道具、製造方法、試験、品質管理など、製品づくりのすべてに関与して相互の調和を



トニー映画の始まりとなった「ジャズ・シンガー」

保ち、ひとつひとつにはわずかな妥協も許さない完璧主義者でした。彼のフィロソフィーは、彼自身で会社を運営しないかぎり遂行することができないものでした。彼自身のJBL社で最初につくりあげた38cm径D130ワードレンジ・ユニットは、このことをはっきりと裏づけています。完成度を極めた不朽の名作D130。私たちは、ここにジム・ランシングの魂をみることができます。彼がJBL社に遺した作品は、続くD131やD208、175などわずかな数でした。しかしその基礎技術と精神は今も生き続けているのです。

1954 D30085ハーツフィールド。名高いこのホーン・スピーカー・システムによって、JBLの名は一躍全米に轟きます。1954年に誕生し、翌年には「ライフ」誌から夢のスピーカーと讃えられた優雅なコーナー・システム。それは、2代目の社長ウリアム(ビル)・H・トマスをはじめ、ジム・ランシングの遺志を継いで最良のスピーカーづくりに情熱を燃やしてきたJBL社の人々が、得るべくしてかち得た栄光でした。フォールデッピング・コーナー・ホーンに納められた38cmの150-4Cウーファー、金色に輝く537-509ホーン・レンズと375ドライバー。ウリアム・ハーツフィールドの卓抜なエンクロージャー・デザインと、パート・ロカンシーによる広指向性ホーンの創造がみごとに結びつき、JBLの進む道を決定的に明示したのです。ハーケネス、パラゴン、オリンパス、ランサー、さらに4300シリーズ・スタジオモニター…。クラフトマンシップにあふれたJBLは、創立者ジェームス・B・ランシングの強固な基礎技術を縦横に飛躍させ、誇り高い独創性と真摯さの成果であるJBLサウンドを磨いてゆきます。



1937年映画館用小型システム“アイコニック”



1930年代、マルチセラーホーン製作工程の様子



科学アカデミー賞を受賞した "シャーラーホーン" システム



REPのメンバーと会議中のランシング(左)



コーナーシステム D30085 "ハーツフィールド"



1947年 ランシングの傑作D130ユニット

The Manufacturing

創立から約40年。現在のJBL社は、ロサンゼルス郊外のノースリッジに本拠を構えています。55万平方フィート(約5万1千m²)の広大な敷地はさながら緑地公園のように美しく、見事にレイアウトされた建物とあわせて、ロサンゼルス市協会から表彰状を授与されたほど。ここには、JBL社の全機能が集約されており、素材開発から製品の出荷に至るすべてのプロセスを自社で管理して品質に万全の責任をもつという伝統的なポリシーを守りぬいています。JBLは、製品の構成パーツはもとより、それらを作るために必要な治工具類まで一貫して自社で製作します。エッジワイヤ・ボイスコイルのための圧縮フラット・ワイヤーや、スピーカー・ユニットのダイキャスト・フレームなどもすべて社内生産。このことは、性能と品質に少しのあいまいさも妥協も許さずみずからそれらを開発したジェームス・B・ランシングの手法そのままなのです。ライン方式の工場内では、品物の移動にベルトを利用する他は終始手づくりの工程が続きます。それにより従業員は、練達のクラフトマンとして品質を正しく見分けることができます。ボイスコイルの巻線技術をマスターするにも8~10年。機械では今だに不可能な精度を、鍛えあげられた手の技が確かに支えているのです。「クラフトマンと単純な作業者の差は品質に対する感覚です。だからこそ我々は人材を選びぬき、品質に敏感なサークルの維持と育成に力を注いでいるのです」と工場の責任者トニー・ペチエコは誇らかにクラフトマンシップの原理を語っています。製品のひとつひとつにこめられた人間の息吹き、それがJBLサウンドに託されて私たちの心をうつのでしょうか。



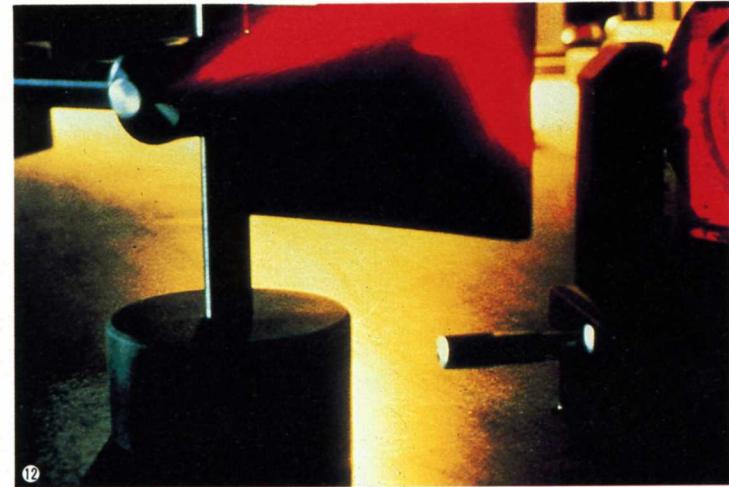
JBLのテクノロジーの基礎は、ほとんどがゲームス・B・ランシングによって築かれました。JBLのみならず、今日の主要なスピーカー技術の大半が40年

以上も昔に彼の手で完成されていたといっても過言ではありません。たとえばエッジワイズ・ボイスコイル、切削加工の磁気回路、コンプレッション・ドライバー等々。世をはるかに抜いた驚くべき彼の技術と斬新で緻密な発想法は、JBLの根底を支える無形資産として継承され、第2、第3の後継者を輩出しながら今日に至っています。

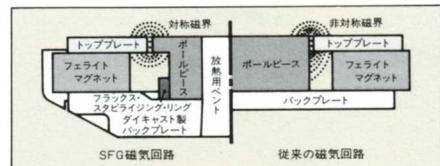
■Symmetrical Field Geometry(SFG): ジェームス・B・ランシングが創造したアルニコVマグネットと一体型ヨークによる精密な内磁型強力磁気回路は、きわめて完成度の高いものでした。それだけに、後のJBLエンジニア達にとっては、フェライト化によって同等以上の性能を得ることが大きな課題になりました。最終的に開発されたSFG磁気回路(左)は、在来型(右)と違ってボイスコ

イル・ギャップ部に対称な磁界が形成され、ポールピースに巻かれたフラックス・スタビライジング・リングの効果とあわせて、アルニコよりもずっとすぐれた磁気性能を実現しています。第2高調波や相互変調歪の極減で、さらに音質が向上したのです。

■Bi-Radial Horn: JBLはランシングが好んだマルチセラー型以来、ホーンの能率と指向性についても数多くの技術革新をなしてきました。ドン・B・キールによるバイ・ラジアルホーンは、その集大成ともいえる定指向特性をもち、近年のJBL



②



ホーンはすべてこのコンセプトによって設計・製作されています。バイ・ラジアルホーンの特長は、コンピューター解析にもとづいて能率と指向特性を精密に

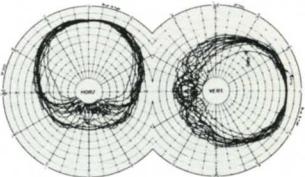
コントロールしたさまざまな設計ができることがあります。使用帯域の全体にわたって均一な指向性が保たれるため、在来型のホーンよりたとえ狭角度でも実質的なサービスエリアを拡大することができるのです。指向特性をとくに重視すれば、水平・垂直方向とも100度といった広角定指向性ホーンも容易に得られます。このホーンは、4400

シリーズ・スタジオモニターに使われてJBLの先進技術のシンボルとなっています。

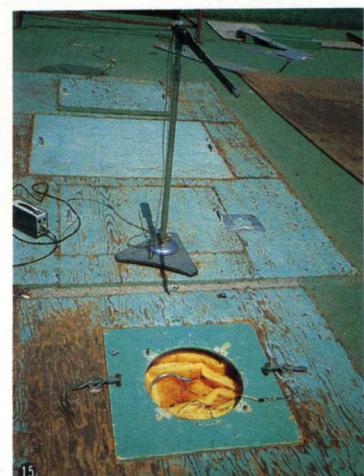
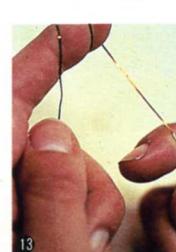
■Diamond Suspension: ランシングの偉大な業績は、もちろん振動板にも遺されています。たとえばコンプレッション・ドライバーの空圧成型ダイヤフラム。今

日のJBLは、レーザー・ホログラフィによるモード解析などでそれをさらに高性能化しています。もっとも大きなその成果が、ダイヤモンド・サスペンション構造のピュアチタン・ダイヤフラムです。精度と高域特性を格段に向上させたダイヤモンド・サスペンション。軽さと耐久性を見事に両立させたピュアチタン。

JBL独自の構造と素材とがあいまって、素晴らしい高性能でしかもプロフェッショナル・ユーズに欠かせない高信頼性をもつ革新的なダイヤフラムが誕生したのです。



バイ・ラジアルホーン2344の極座表特性



①②④ カリフォルニア州ノースリッジに位置する本社工場。

約51,000m²の広大な敷地をもつ。

③ すべて自社内で生産されるダイキャストフレーム。

④⑤ コーン紙の取り付け作業。

⑦ 完成した製品を1本1本カートンケースに収める。

⑧ 打合せをするJBLのエンジニアたち。

⑨ 空気成型のアルミセンタードーム。

⑩ マグネットに着磁を行なう工程。

⑪ エンクロージャーの接合強化のため金具による締め付けが行なわれる。

⑫ レーザー・ホログラフィによるモード解析は振動板の素材

や構造の研究に役立っている。

⑯ 能率と耐入力を高めるエッジワイズボイスコイル用リボン線。

⑰ JBLはエクストロニクス分野にも注力を傾けている。

⑱ 工場敷地内に設けられたスピーカー測定用の設備。

音波は半球状の空間に向かって放射される。

⑲ JBLは早くからコンピューターを導入して解析を行なっている。

⑳ 試聴室で試作モデルのヒヤリングを行なうスタッフ。



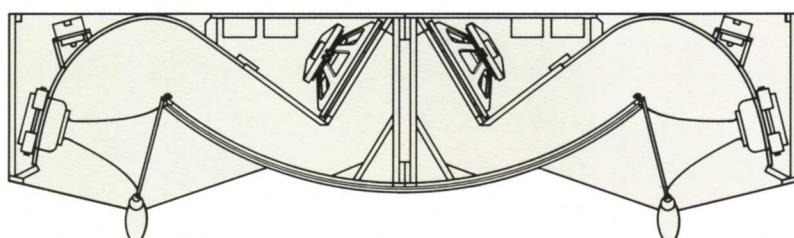
Paragon

D44000WXA





PARAGON：模範、手本、あるいは100カラットを超える純白無疵のダイヤ。いずれをとっても至上を意味するこのプリリアントな一語ほど、D44000WXAにふさわしい名称はないといえるでしょう。1957年以来、四半世紀にわたってオーディオファイルを魅了し続けてきた冠絶の名品、パラゴン。リチャード・H・レンジャーの原設計をもとに、アーノルド・ウォルフによってデザインされたパラゴンは、ステレオ・レコードの実用化と時を同じくして完成。誇らかに「完全なステレオ」をうたいながらデビューしています。事実、リフレクター・パネルによる巧みな音場構成はステレオの本質を正しく衝いており、卓越した造形美とともに、不滅の業績として幾世代も語り継がれてゆくに違いないのです。ここには、スピーカーという単なる物体から昇華した美の概念そのものがファンタスティックに輝いています。パラゴンは、栄光を極めた歴史的な名作といえるだけでなく、むろん最新の製品でもありません。時の流れを超える価値—そこに、このスピーカーだけの味わいとおもしろさが存在します。LE15Hウーファーと376大型ドライバー+H5038P楕円ホーン、075リング・ラジエーターが奏でる音は、コンダクターとなるあなた自身のイメージと意志の力によって決定され、成長していくのです。





B460(エボニー)

JBLのコンシューマー・スピーカー・システムは、スタジオモニターをはじめとするプロフェッショナル・シリーズの技術を取り入れながら、いくつかの点では異なったファイアーソフィーをうちだしています。ハーツフィールドやハーケネス等の時代から受け継がれてきたアトラクティブな外観をひとつの例とすれば、一般にJBLサウンドと呼ばれる音にも、コンシューマー・シリーズはより多彩で自由なアプローチを試みてきたといえるでしょう。たとえば、同じように見えるブックシェルフ・システムでも、プロ用のコンロール・モニターとコンシューマー用のLシリーズ製品とでは音のニュアンスが異なっています。そうしたJBLの考え方を、今日もっとも明確に表現しているコンシューマー・システムがL250です。風変わりなこのトールボーイ・システムは、4300シリーズと4400シリーズの思想を統合し、プロ用システムでは不可能な大胆さで理想の音を徹底追求しています。広帯域にフラットなパワーレスポンスや位相の整合はもとより、エンクロージャーの回折効果、レゾナンス、バスレフ・ダクトの位置にいたるまで厳密・周到に計算し尽された必然のフォルム。ユニットはすべて直接放射型として波面をそろえ、位相特性のよい6dB/octのネットワークで結ば

4way Speaker System L250

3way Speaker System L150A

Super Woofer System B460



L250(エボニー)



L150A



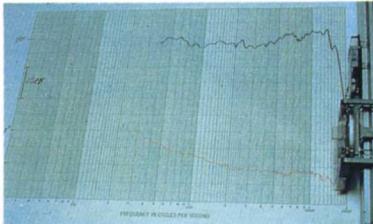
れています。その音は、もはやプロ用・家庭用の区別を超えた新たなJBLの世界。外装仕上げは標準のウォルナットの他にオプションで4種類があります。写真のL250はエボニー仕上げです。そして左のB460は、これもユニークなスーパー・ウーファー・システム。46cmユニットによって、デジタル録音などの膨大な低音情報をクリアに再生するためのシステムです。専用デバイダーBX63を併用することによって、既存のシステムの低域を1オクターブ以上延長し、軽視されがちなローエンドの再現性を一気に高めます。L250に劣らず感動的な新しい音世界の発見をもたらすB460。木部の仕上げは、やはり5種類です。右側のトールボーイ・システムL150Aは、かつてオリンパスやランサー等で躍声価を高めたパッシブ・ラジエーターを採用し、少ない床面積で最大限の低音再生を追求しています。ウーファーはSFG磁気回路搭載の128H、30cm口径です。スコーカー、ツイーターの位置はむろん厳密に音像定位を考慮しています。グリルカラーは3種類。このようにJBLのコンシューマー・シリーズは、家庭用にふさわしい趣味性をたたえながら、それぞれに最高の可能性を追求しているのです。



〈L250〉●許容入力:200W ●インピーダンス:8Ω ●音圧レベル(IW, 1m):90dB ●寸法(W×H×D):57.2×132.1×36.2cm ●重量:61.4kg 〈L150A〉●許容入力:100W ●インピーダンス:8Ω ●音圧レベル(IW, 1m):89dB ●寸法(W×H×D):43.2×105.4×33.0cm ●重量(梱包時):41kg 〈B460〉●再生周波数特性(-3dB):26Hz~63Hz(BX63使用) ●音圧レベル(IW, 1m):94dB ●インピーダンス:8Ω ●寸法(W×H×D):97.4×63.1×61.4cm ●重量:57kg



Studio Monitor **4355**





1972年から10年余、JBLスタジオモニターのトップの座に君臨した4ウェイ・5スピーカー・システム4350。その後継機4355こそは、今日のJBLを代表する最高規範であり、あらゆるモニター・システムの新たな目標でもあるといえるでしょう。いうまでもなくここには、4300シリーズの設計思想と技術のすべてが集大成されています。バイアンプ駆動専用3ウェイネットワークの全面的な新設計をはじめとして、あらゆる部分にJBLの最善と至純が息づき、エンクロージャーのサイズとプロポーションを除けば何もかも新しいといえるほど徹底的にリファインされた4355。たとえばパワーハンドリングが違います。とりわけ低音域のリニアリティが格段に違います。放射エネルギーの平坦さと解像力が違います。また、レベルコントロールがツイーターのほかミッドレンジにも設けられたこと、バスレフ・ダクトの変更で設置面の干渉が少なくなったことなど、遙かに使いやすくなっています。デジタル・オーディオ時代を先導するその音は、むろん4300シリーズの頂点。文字どおり圧倒的にパワフルで俊敏で透明感にあふれ、驚くばかりに緻密です。JBLサウンドを知り尽くしたあなたにも、ふたたび心からの感嘆をお届けする4355。エンクロージャーの横幅は約122cmとなっています。



●許容入力(連続プログラム)：400W(290Hz以下), 200W(290Hz以上) ●インピーダンス：4Ω(290Hz以下), 8Ω(290Hz以上) ●周波数特性(±3dB)：31.5Hz～18kHz ●指向性(水平×垂直)：60°×30°(12kHz) ●音圧レベル(IW, 1m)：96dB
●クロスオーバー周波数：290Hz, 1.2kHz, 10kHz ●エンクロージャー容積：269ℓ(ウーファー), 45.3ℓ(ミッドウーファー) ●寸法(W×H×D)：122.3×90.1×51.0cm ●重量：120kg



あらゆる音楽のジャンルを包容して、もっとも信頼性ゆたかなリファレンスであり続けたJBLモニター。それ故に全世界のスタジオで数多く現用されているJBLモニターは、高度なオーディオ・ファイルにとってもすでに欠かすことのできないハイオリティ・スピーカーの代名詞になっています。4320を端緒として、4341、4343などのエボッキングやメイキングな話題作をつぎつぎに輩出しながら音の時代をリードしてきた4300シリーズ。4355を別格の超弩級モデルとすれば、今日のリファレンスは4345、あるいは4344に落着きます。申しぶんなく広帯域でフラットな周波数レスポンス。大入力にも小入力にも低歪率でセンシティブな追従性を示し、極度にパワー圧縮が少ない平リニアリティ。そして、ハイプレッシャーなサウンド・エネルギーを伸びやかに解放する強大な耐入力。4345および4344は、スタジオモニターが満たすべきこれらの要件を徹底して究めたデジタル・オーディオ時代のニュー・リファレンスです。これからサウンドづくりとトップレベルの音楽再生を担う両機は、4ウェイ構成で存分にレンジを広げるとともに、ミラー・イメージペアのユニット配列を創始しています。それは単に左右対称ということではなく、最良

4345
Studio Monitor
4344



4344

のステレオ音場と音像定位を得るために、精密な位置調整をおこなったシンメトリカル配列なのです。デバイシング・ネットワークの絶妙な位相補正技術とあいまって、4つのスピーカー・ユニットは一点の曇りもないまでの透明さでひとつに融けあい、JBLサウンドの真髄を力強くひびかせます。わけても、46cm大口径ウーファーによる4345の低域は、息をのむほどの魅力にあふれていて、迫真ということの次元を変えてしまいます。4345と4344の相違は、このウーファーと付随的なエンクロージャーの大きさだけ、と見えるかもしれません。しかし実際は出力音圧レベルが異なり、そのためネットワークの細部も異なり、またドライバーはそれぞれ別のユニットが使われています。4345のドライバーは2420、4344は2425J。さらに4345では290Hzのバイアンプ駆動が推奨されていることも大きな違いです。これらの事実は、スピーカーに対する

JBLの考えかたとデリケートな音づくりの秘密を解く手がかりとなることでしょう。優れた先端技術の粋を集めた両機の内部には、スタジオモニターを熟知したJBLならではのフロソフィーが深く息づいているのです。



〈4345〉●許容入力(RMS)：120W ●インピーダンス：8Ω ●周波数特性(±3dB)：32Hz～20kHz ●音圧レベル(1W、1m)：95dB ●クロスオーバー周波数：320Hz、1.3kHz、10kHz ●寸法(W×H×D)：76.5×109.6×47.0cm ●重量(梱包時)：112kg
〈4344〉●許容入力(RMS)：120W ●インピーダンス：8Ω ●周波数特性(±3dB)：35Hz～20kHz ●音圧レベル(1W、1m)：93dB ●クロスオーバー周波数：320Hz、1.3kHz、10kHz ●寸法(W×H×D)：63.5×105.1×43.5cm ●重量(梱包時)：104kg



4430

スタジオモニターといえば、かつては2ウェイが定石でした。JBLの創始者ジェームス・B・ランシングが1934年に作りあげた最初のプロ用スピーカー・システムも2ウェイ。後年、ステレオ時代に入ても2ウェイ・モニターの全盛は長く続きます。急速なワイドレンジ時代の幕あけは1970年代の初頭。JBLがプロフェッショナル・ディヴィジョンを独立させたことからでした。それまでの間、スタジオモニターの姿はほとんど変わることなく2ウェイであり続けたのです。その理由はいろいろ考えられますが、主な点はやはり音のまとまりや音像定位のよさ、そして長い歴史に裏づけられた信頼感がプロに好まれたためといってよいでしょう。しかし、録音技術の進歩とともに、2ウェイの限界がはっきりと見えはじめたこともたしかです。JBLは、4300シリーズによってスタジオモニターの常識を一新し、長かった2ウェイの時代に終止符をうちました。そして1980年代、JBLはふたたび自らの手で新たな2ウェイ・モニターの時代を開拓したのです。鬼才ドン・キールによって創案されたユニークなバイラジアルホーンが眼を奪う4400シリーズ。4435および4430は、まったく革新的なこのホーンによって指向特性とパワーレスポンスの驚くべき均等

Studio Monitor

4435
4430

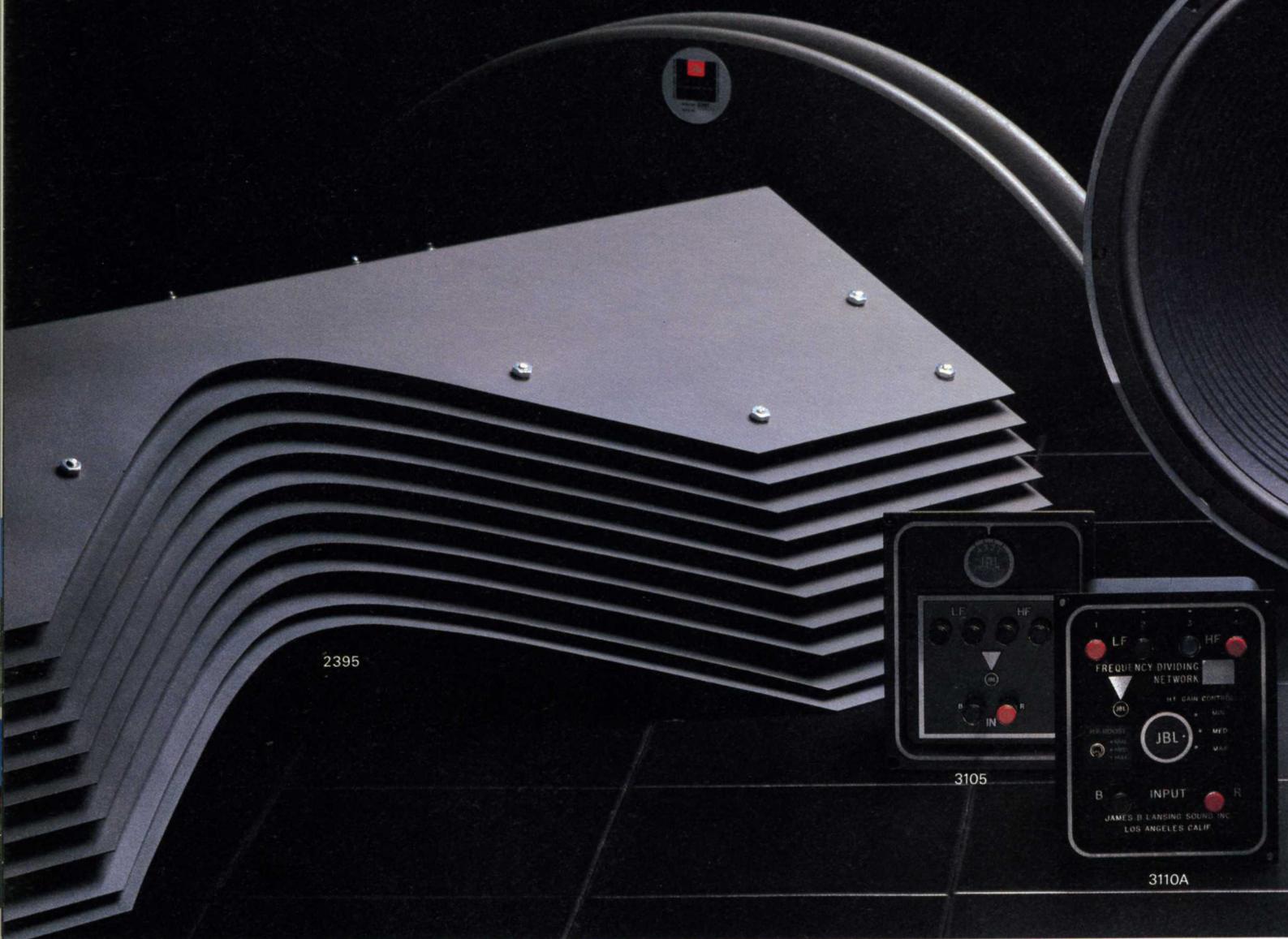


化を達成し、4ウェイにも劣らない広帯域特性で2ウェイならではの長所を鮮烈に拡大しています。じつにバイ・ラジアルホーンは、水平・垂直方向とも100°の定指向性を可聴帯域の上限まで保ち、音場再現や音像定位の決め手となる放射エネルギーのフラットネスを厳密に確保しています。また、ホーンでありながらドライバーとウーファーの振動板位置を同一面に設定できることで、理想に近いタイムドメイン特性を獲得しています。これによって4435/4430は、見えるようにクリアな音像と、4ウェイのように緻密な広帯域レスポンスをシンプルな2ウェイ構成で実現したのです。より大型で低域特性とパワーハンドリングにすぐれた4435は、通常のダブル・ウーファー方式とは違ってエンクロージャーに仕切りがあります。1本の使用帯域を100Hz以下に限定することで位相干渉を防ぎ、バイ・ラジアルホーンと同様な定指向性をもたせ

た細心の設計となっています。使用ウーファーも4430とは別仕様。いずれにせよ4435/4430は、いかにもJBLらしい先進技術によって2ウェイ・モニターの新領域をひらいた記念碑的なシステムといえます。



《4435》●許容入力(連続プログラム):375W ●インピーダンス:8Ω ●周波数特性(±3dB):30Hz~16kHz ●指向性(1.25kHz~16kHz):100°×100° ●音圧レベル(IW,1m):96dB ●寸法(W×H×D):96.5×90.8×51.5cm ●重量(梱包時):114kg
 《4430》●許容入力(連続プログラム):300W ●インピーダンス:8Ω ●周波数特性(±3dB):35Hz~16kHz ●指向性(1.25kHz~16kHz):100°×100° ●音圧レベル(IW,1m):93dB ●寸法(W×H×D):55.6×90.8×48.0cm ●重量(梱包時):79.5kg



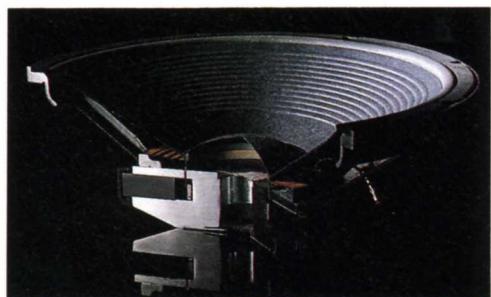
JBLスピーカーの魅力は、美しく高性能なそのユニットにルーツを求めることができます。ジェームス・B・ランシングがJBL社を設立して最初に手がけたオリジナル製品は、38cmワイドレンジ・ユニットD130。第2次大戦後間もない1947年のことで、しかもそれがD130Hとして今日も第一線に生き続けている事実は、JBLの魅力の根源を何よりも雄弁に物語っています。当時、開発されたばかりのアルニコVマグネットに、いちばんよく着目したランシングの非凡な才は、D130をはじめとしてD131や175等の歴史的名作ユニットを生みだし、その後しだいにJBLスピーカー・システムの名声が築かれてゆくのです。現在も過去も、JBLのハイクラス・システムには製番のあるスピーカー・ユニットが使われています。そしてそれらの多くが単独で発売されています。このことと、JBLスピーカーの信頼性は決して無関係ではありません。由緒正しいユニットで構成されたシステムをもつ無上の安心感。最高級のシステムに使われるユニットで独自のJBLサウンドを育てる満足感。どちらにしてもそれは、JBLのもっとも高度な技術とクラフトマンシップを我がものとすることにほかならないのです。

Components





D130に始まる輝かしいJBLユニットの歴史は、確固としたフィロソフィーを完璧なまでに具現する妥協のない設計と、最良の素材を十二分に生かす精密な加工技術によって形成されました。それ故にJBLユニットは、まれにみるようなロングライフを保っています。たとえばLE8T-Hや376のように基本設計の古いユニットも、その基本がきわめて優秀なため最新技術によるモディファイで性能を高めていくことができます。フェライト・マグネットの長所を見事に生かしきった独創的な構造をもつ低歪率SFG磁気回路。大口径ホーン・ダイヤフラムのピストニック・モーション帯域を大幅に拡張したダイヤモンド・サスペンション。JBLユニットには、つねに独創的な新しい技術が導入され、ピュアチタン・ダイヤフラムのような素材の革新もたえずおこなわれています。JBLサウンドの中核となるホーンについても、数多いオリジナル技術を蓄積してきたことはいうまでもありません。さらに、すべてのユニットをベストマッチングの状態で動作させるためのデバイティング・ネットワークも豊富。ECシリーズ・エンクロージャーなどと組み合わせて容易にトップレベルのシステムを構成できるJBLユニット群は、限りないグレードアップの楽しみを秘めて音楽再生の真髄を伝えます。



ほぼ40年間にわたってHi-Fiオーディオと歴史と共にし、数々の名作スピーカーに先進技術を実らせてきたJBL。天才技術者ジー

ムス・B・ランシングの偉業を忠実に受け継いだJBL製品は、スタジオモニターやコンシューマー・スピーカー・システム以外の分野でも時代のリファレンスとされる類稀な実績を残しています。現在、JBLが開発と生産にたずさわっているスピーカーのジャンルは十数種類におよび、およそ音楽再生用スピーカーのすべてをカバーしている、といえるほど多彩です。以下はその一部ですが、さわざて広く深い音楽とのむすびつきが、JBL製品の魅力と底力を決定づけていることはいうまでもありません。

■Theater Series: スタジオモニターやコンシューマー・スピーカー以外のJBL製品といえば、第一にサウンド・リインフォースメント(SR)システムが連想されることでしょう。この分野におけるJBLの圧倒的な業績は、ハイパワーと信頼性とワイドレンジ・低歪率の思想を一体化したことにより、それによってこそ昔ながらのPA(パブリック・アドレス)がSRに進化したといえます。JBLは、ホールや劇場や映画館の音と、その考え方を根本的に変えました。現在のシアター・シリーズはバイラジアルの定指向性ホーンを主体に構成され、サイズや最大音圧、サービスエリアなど、用途と目的に応じて種々の組合せを選択することができます。こまやかでエネルギー豊かな音質は、会場の隅すみまで均一に浸透して最先端のJBLサウンドを思わせます。

■Cabaret Series: キャバレー・シリーズは、ステージ・ミュージシャンのために開発された可搬型スピーカー・システムです。各種の楽器用を始めとして、SR用やステージモニター用など多くの種類があり、いずれも堅牢なトランクケース・スタイルとな



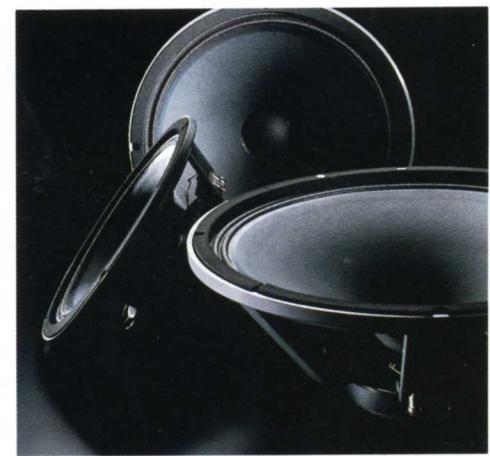
Theater Series

っています。四隅に設けられたコーナーガードは積み重ねたときのすべり止めを兼ねているため、スタック使用で限られたスペースを有効に生かし、あるいはパワー・ハンドリングや指向特性を高めることができます。このシリーズには、専用設計のミュージカル・インストルメント用Eシリーズ・スピーカー・ユニットが使われています。高能率・高耐入力で再生レンジも広く、とりわけ電子楽器のSRに要求されるシビアな条件を余裕たっぷりに満たしてくれます。よりワイドレンジが必要な用途に対しては、バイラジアルホーンによるハイフレンジ・ドライバー・ホーン・ツイーターを付加した2ウェイ・モデルが用意されています。最高水準の音楽再生に賭けるJBLのポリシーと技術は、ここでもまったく変わることはないのです。

■MI-Series: プロのアーティストはもとより、アマチュア・ミュージシャンにも広くJBLサウンドを。MIシリーズは、高い使用実績を誇るJBLの楽器用スピーカーの血統をダイレクトに受け継いで誕生したハイ・コストパフォーマンス・スピーカーです。



Cabaret Series



MI-Series

Fシリーズ、Kシリーズ、そして現在のEシリーズと、つねに時代をリードするアーティスト達の要求にこたえ、音楽表現の可能性を高めてきたJBLのミュージカル・インスツルメント・スピーカー。MIシリーズには、それらのノウハウとSFG磁気回路やエッジワイヤ・ボイスコイルなどの技術が忠実に生かされています。単体ユニット3機種の他にSR用ヒステージモニターシステムも用意。身近になったJBLサウンドが、プレイする楽しさと表現力とをはるかに深めてくれます。



Electronics

■ **Electronics:**かつて、シンメトリカルTサーキットなどでJBLがオーディオ・アンプの流れを先導し、今日の基礎となる技術を確立したことはよく知られています。スピーカーと同じセンス、同じ細心さで練りあげられ、もうひとつの伝統となっているJBLのエレクトロニクス技術。現在では、オートマチック・マイク・ミキサー7510や、スタジオモニター用、SR用のアクティブ・チャンネル・デバイダー5234Aに高度なその発展をみることができます。広帯域・高S/N・広Dレンジなどの基本性能にくわえて、用途に応じシステムティックに機能を拡大できる見事な汎用性。たとえば7510は、モジュラー・ユニットの追加で最大24チャンネルのマルチ・ミキサーに発展してゆくのです。

■ **Automotive Loudspeakers:**機能美にあふれた、JBLならではのカースピーカーTシリーズ。ぶ厚いアルミ・ダイキャストのフレームには、どのようなあいまいさも妥協も許さず徹底してスピーカーを究めるJBL精神が息づいています。「車」



EC-Series

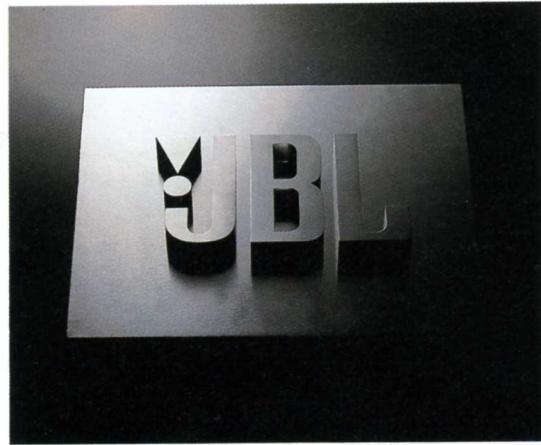


Automotive Loudspeakers

という過酷な使用条件下でスピーカーはどうあるべきかを根本からJBLは問い合わせ、プロ用とコンシューマー用スピーカーの分野で永年にわたって培った膨大な技術とノウハウをひとつひとつたんねんに抽出しながらTシリーズをつくりあげたのです。頑丈なフレームは、必ずしも万全でない取付け面の平坦度と振動への周到な対処。コーン紙はポリプロピレン・コーティングで防湿されています。磁気回路は低歪率なSFG。ボイスコイルは高耐入力のエッジワイヤ巻き。ツイ

ターのちょっとした角度にも、指向性への配慮があります。そして取付けスペースに応じて機種も豊富です。持ち運びが必要ならミニスピーカーLT1。ウーファー・フレームとノッフルが一体のダイキャストでつくられており、これもおそらく頑丈です。JBLサウンドの世界はこうして広がり、かけがえのない喜びを音楽とともに運びます。

■ **EC-Series:**再生音がけっこうよく人格と信念の投影であると気づけば、やがてみずから音を創ることに興味がわきます。JBLの最高級ユニットを駆使してオリジナルサウンドの真髄を探りたい。そんな目的のためにECシリーズがあります。ECシリーズは、JBLとサンスイが共同で開発したバーサタイルなシステム・エンクロージャー。4300シリーズのノウハウをフルに活かし、北欧産樺桜等厚合板や25mm厚の音響用パーチクルボード等の最高級素材で組みあげられています。サブノッフル等の交換で、さまざまな使いかたとグレードアップができる、限りない音の楽しみをどうぞ…。



日本総代理店



●この製品は米国で製作されたものです。●改良のため予告なく、意匠、仕様の一部を変更することがあります。 東京都杉並区和泉2-14-1 ●製品の色調は印刷の都合上、実物と多少異なる場合があります。

'83.12作成 (N3003KI)

Price List

JBL

'84 ALL MODELS

Consumer

■スピーカーシステム

品名 標準価格(円)

D44000WXA 3,500,000

L250(ウォルナット) 520,000

L250(ブラック) 520,000

L250(オーク) 570,000

L250(エボニー) 780,000

L250(ローズウッド) 780,000

L150A 290,000

L112 168,000

L96 148,000

L56 90,000

L46 70,000

L15 60,000

J216 29,800

J216BK 29,800

■スーパーウーファーシステム

品名 標準価格(円)

B460(ウォルナット) 350,000

B460(ブラック) 440,000

B460(オーク) 440,000

B460(エボニー) 530,000

B460(ローズウッド) 530,000

B380 170,000

■ユニット

品名 標準価格(円)

D130H 66,000

LE8T-H 49,000

N2400 17,000

HL88 200,000

■ECシリーズ

品名 標準価格(円)

EC138 78,000

EC146 120,000

EC246 160,000

■オプション

品名 標準価格(円)

BX63 60,000

MA15 4,000

Professional Series

■モニターシステム

品名 標準価格(円)

4355 1,200,000

4345 870,000

4344 670,000

4312 153,000

4301BWX 93,000

4435 590,000

4430 470,000

4411 220,000

4401 68,000

■キャバレーシリーズ

品名 標準価格(円)

4602B 220,000

4612B 230,000

4621 260,000

4622 350,000

4623 370,000

4625 260,000

4628B 305,000

4680B 500,000

4691B 325,000

4695 400,000

4602CVR 20,000

4612CVR 20,000

4620CVR 25,000

4680CVR 30,000

Automotive Loudspeakers

■カースピーカー

品名 標準価格(円)

T545(×2) 68,000

T540(×2) 60,000

T425(×2) 54,000

T420(×2) 48,000

T205(×2) 42,000

LT-1(×2) 120,000

■MIシリーズ

品名 標準価格(円)

MI-631 165,000

MI-632 225,000

MI-15 39,000

MI-12 34,000

MI-10 29,000

■スピーチ/ワイドレンジ

品名 標準価格(円)

2105H 24,000

2118H(J) 40,000

2122H 56,000

2202H 66,000

■ウーファー

品名 標準価格(円)

2213H 51,000

2220H(J) 69,000

2225H(J) 72,000

2235H 79,000

2240H 135,000

2245H 135,000

■Eシリーズ

品名 標準価格(円)

E110-8(16) 54,000

E120-8 67,000

E130-8 71,000

E140-8(16) 72,000

E145-8 92,000

E155-8 140,000

■ツイーター/ドライバー

品名 標準価格(円)

2402H 53,000

2403H 64,000

2404H 62,000

2405H 60,000

2425J(H) 82,000

2445J 140,000

2441 190,000

2482 190,000

Professional Series

■ホーン/レンズ

品名 標準価格(円)

2301 30,000

2307 16,000

2308 14,000

2309 30,000

2310 53,000

2311 20,000

2312 22,000

2343 70,000

2344 61,000

2360 200,000

2365 210,000

2366 330,000

2370 50,000

2380 75,000

2385 75,000

2395 160,000

2397 60,000

■スロートアダプター

品名 標準価格(円)

2327 16,000

2328 17,000

2329 21,000

2330 20,000

■ネットワーク

品名 標準価格(円)

3105 23,000

3106 23,000

3110A 68,000

3115A 66,000

■ミキサー/基板

品名 標準価格(円)

7510 700,000

7510-01 250,000

■オプション

品名 標準価格(円)

2505 19,000

2506 13,000

9375 24,000

MC4401 12,000

MT4612 35,000

日本総代理店

Sansui
山水電気株式会社

'84年1月1日現在